『まんじ』119 号(2011.2)

八つ当たり語録（二）

新井　宏

人は、己れをつゞまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世を貪らざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり（徒然草）。

いくら稼いでも良いが、まだ使えるものを捨てたり、人の座るべき場所に居座ったり、人の食い扶持まで奪う奴があるか。質素な生活をしていれば、いずれ残った金は国がちゃんと税金で回収してくれる。

年金制度が破綻するのは当事者にとって常識であった。年金の支払いを少しでも減らしたい。申請を忘れてくれたら儲けもん。それが潜在意識であり、国民だってそう思っていた。しかし、いまや「正義のため」今後も二万人で四年間かけて、何やらを照合するのだという。予算は四千億円ほどか。これだけ騒いだのだから、大口はもうほとんど判明している。

何も文句を言っていない者に対して、再三にわたって確認のための書類が郵送されてくると全く腹立たしい。

円高に苦しんでいる。

本来なら、毎日毎日、円高を喜ばなければなるまい。日本人の資産がドル評価すればどんどん増えているのだから。しかし、貧しくとも、誰にとっても働く場があり、見合った収入が保証されている世界が健全である。

日本の場合、円高が進めば進ほど働く場が海外に逃げ出してしまう。だから、インフレを起こし、円安に誘導し、日本全体を貧しくした方が良い。そうすれば、自動的に政府の債務問題も解決される。損するのは資産家や老人たちである。

リーマンショックを起した米国のドルが暴落したのなら良くわかる。結果は全く逆で、世界中の通貨がドルに

対して十から三十パーセントも暴落した。理由は簡単。信用不安の解消にはドルを抱え込むしかなかったからである。例外は三十パーセントも円高になった日本のみ。

使えないドル（米国債）なら腐るほど持っているのだから無理もない。

何だって？、遠慮なく使えば良いじゃないかって？。使えば、ますます円高になり、一兆ドルも米国債を持つ日本は大損する。全体としては、国富が著しく増大してうれしいはずなのに忌み嫌われる円高。

北朝鮮に頼んで、偽円を大量に発行してもらうしか手立てはないのか。

ただ働きというと損をした感じだが、ただ遊びと言えば得をした感じだ。いずれにせよ、これからは、ただ働きやただ遊びが高尚な世界になる。

するとどうなるか。国民総生産はどんどん減少する。サービス産業がセルフサービス化するからだ。何しろ国民総生産に占めるサービス産業の割合は九十パーセントを超えているのだから。

そして思う。売春が禁止されている中で、世には結婚せずに過ごす男女がますます増えている。事情がゆるせば、性を互いに無償で提供する「ただ働き」、いや「ただ遊び」が極めて合理的な仕組みになるのではないか。

貧困を断罪する人びとの寄るべき根拠とされたマルクス主義が体制を掌握するやいなや、人びとを抑圧する思想に転化したということこそ、人類が二十世紀に見た悲劇であった。その反面、資本主義には自由があったので、社会主義から学ぶことが出来て得をした。社会主義は資本主義から学ぶ自由を持たなかった。そして滅びた。

社会主義が駄目になり、資本主義が安心して牙をむき始めた。これからは弱肉強食時代、貧富の差がますます拡大する。もう一度社会主義に学ばないと全てが崩壊する。

政治の要諦とは、国家間、地域間、老若間、貧富間、労使間、男女間、職業間、などの利害の調整にある。それなのに選挙に勝ったからと言って、一方的な政策を進めようとする愚かさ。

左が政権を採ったら、右を如何に取り込むかが、右が政権を取ったら左を如何に取り込むかが政治力学。右の中でも最も右の安部晋三が、母体よりも右の政策を取って自滅。左の中でも左よりの盧武鉉や鳩山由起夫が母体よりも左の政策をとって自滅した。

本心を如何に隠すかの知恵がなさ過ぎる。与党をぶったおすと叫んだ小泉純一郎のような演技が必要なのである。政権を取ったら、母体からの支持などどうでも良い。かれらは支持するしかないのだから。

もっとも、党内派閥闘争こそが政治という現実がその前に横たわっているが。

外交は国の利害を取引する場。そこに国内の論理を持ち出せば先にカードを切ることになり必ず損をする。だから国内政治家に外交をまかせてはならない。

実効支配している島を自国（韓国）の領土だと叫ぶ馬鹿がどこにあるか。相手が何を言っても知らん振りしていれば良いのに。おかげで、国際社会からは竹島問題ありと見られ、日本政府はほくそ笑んでいる。

米国は北朝鮮をテロ国家には再指定しないという。天安艦への魚雷攻撃は「戦争」であり「テロ」ではないとの解釈だ。そういえば、朝鮮半島は休戦状態で戦争中なんだっけ。

「科研費」の研究終了から二年過ぎても報告書が未提出の場合がたくさんある。これを怠慢と言っているが、大部分はできもしない夢物語を作文して、申請を通過させたことが原因。できもしないことを作文する「詐欺行為」は民主党のマニフェストばかりではない。

飯が食えないことを覚悟した者だけが、格好の良い仕事を捜し求めても良い。格好の良い仕事では、金銭以外の満足感があるのだから、金銭的な収入は少なくとも良いというのが、バランス感覚。

しかし、格好の良い仕事ほど高収入であるとの「誤解」に毒されている。大部分の小説家や画家、作曲家などは、手弁当で努力しているではないか。

最先端のバイオ分野の研究者が一番生活に困っているのを知らないのか。

世界中の人が、日本人並みの生活をすることは、資源と環境問題から不可能だ。貧富の差が固定すれば、地域間の紛争が必然的に起こる。知恵とは生活水準を如何に切下げるかである。

びっくりしたニュース。都の教育委員会は「進学指導重点校」の選定に当たって、「東大、京大、一橋大、東京工大の現役合格十五人以上」という基準を導入することを決めたというのである。

東京都教育長の小尾乗雄が進めていた都立高校の学校群化、すなわち平準化政策はどこにいったのか。そのお陰で、わが母校小山台高校は普通の高校になった。そんなことはどうでも良い。菅直人も小山台高校出身であるが、ちっとも嬉しくない。

個性的なタレント出身の地方首長が活躍している。では日本の総理大臣にどうか。

地方首長などは、いくら気が強く偏っていてもいざとなればすぐ簡単に取り替えが効く。だから消耗品でも良い。しかし一国の総理は、先の先まで見通して慎重に動かなければならない。だから、何もしない佐藤栄作のような総理が理想的なのである。アメリカも何もしない大統領を選ぶべきである。

リビアのカダヒィーは国際サッカー連盟がマフィアだという。豊かな国が貧しい国から優秀な選手を人身売買でつれてきているからだという。なるほど、なるほど。

民族浄化のヒットラーはＤＮＡ鑑定によるとユダヤ系だった。なるほど、なるほど。

盧前大統領が二〇〇三年の三・一独立記念日で「過去の真実を糾明し、心から謝罪し、賠償するものがあれば賠償し、和解しなければならない」と拳を振り上げた。外交としては甚だ非礼なものであったが、そこまではまだ良かった。しかし小泉前首相が「国内向け発言でしょう」と軽くいなすと、激怒してしまった。

人でも国でも、劣等感を刺激されると激怒する。問題は劣等感が鋭敏過ぎると、往々にして想像や誤解からも怒りだすことである。

そして、誤解であることを指摘すると、更に火に油を注ぐ結果になる。

韓国にはポシンタンという犬肉の料理がある。それを報ずる外信でもあると大騒ぎする。馬鹿にされた訳ではないのに、馬鹿にされたと感じてしまうからである。

始末に負えない「論文」というのがある。

過去の研究を参照することなく、誤った情報や理屈に合わない自分勝手な約束事を寄せ集めて導きだした主張である。いわば激しい「思い込み」であるだけに、部分的に誤りを指摘しても、著者をいきり立たせるだけである。だから最良の方法は無視すること。しかし、それを反論が無かった証拠とするのだからますます始末に負えないが。

始末に負えない主張というものがある。

漢字もマンガも柔道も韓国が発祥の地であり、孔子も韓国人だというのである。これほど率直に劣等感を口にする民族もないだろう。中国の東北三省ばかりでなく、山東省や華北までも朝鮮領土だったと主張する連中もいるのだから、対馬を自国領土と言っても不思議でない。

ましてや、竹島(独島)をや。

誰もほめてくれないと自分で自分をほめる。これを劣等感という。弱い犬ほどキャンキャン吠える。ハリネズミは全身の針を逆立てて外敵を威嚇する。劣等感のなせる技である。

どこの国でも歴史には恥ずかしさを持っている。それをムキになって否定すれば、ますます相手はいきり立つ。一国の総理が「慰安婦強制連行に国家が関与した事実は見つかっていない」などというのが、最低最悪。こんな言葉は、下っ端の官僚の言うことである。

今や、韓国においても「反日」は崩壊しつつある。その反日の砦として従軍慰安婦問題を蒸し返しているのである。慰安婦問題を語れば語るほど、恥ずかしく惨めになる韓国人も多くいるのである。

狭い地球上に百億の人が住むには、ハリネズミになって、居場所を確保するか、受ける抵抗が小さくなるように身を小さくして接し合うかのふたつの道がある。より多くの人が住めるのは後者である。

いまを生き延びるための哲学。話題のマイケル・サンデルの『正義』は確かに面白い。

米環境保護局は大気汚染の被害評価にあたって、ひとの命を三百七十万ドルとしたが、七十歳以上の高齢者は二百三十万ドルに割り引いた。しかし反発が多くすぐに取り消した。

カントは嘘をつく行為に非常に厳しかった。しかし、嘘なしにこの世が成立つはずがない。「嘘も方便」を認めぬカントも「真実ではあるが誤解を招く表現」なら良いとしている。

山本夏彦は言った。汚職は国を滅ぼさないが、正義は国を滅ぼすと。

前の世代の犯した過ちを償う道徳的な責任があるか。前の世代と言っても、ジンギスカンの時代もあるし、アメリカインディアンやオーストラリア原住民の時代もある。アヘン戦争の時代もあるし、日韓併合時代もある。犯罪にも時効があるように、歴史にも時効がある。

大きすぎて潰せない。手足や胃・肝臓なら切除できても、心臓は取り外せない。ただし、今や、他人の心臓を移植できる。現代の資本主義もそこまで行かなければ本物ではない。

一流企業のＣＥＯの年収は、米が一三三〇万ドル、欧が六六〇万ドル、日本が一五〇万ドルだと言う。

金正日の体制が早く崩壊して欲しいと願っている人が多いかもしれない。しかし、中国はもとより韓国も金正日政権の崩壊を心の底から恐れている。一人当りの所得が千ドルにも満たない最貧国から難民があふれ出たら、全く対応できない。

その上、混乱の中、ソウルが砲撃されるかも知れないし、核が奪われてテロ示威が起きるかも知れない。そうなれば、中国東北部も韓国も経済的な打撃だけでは済まない。

耳を貴び目を卑しむ。耳で聞くことは尊重するが、目で見ることは軽んじる意。遠くのことをありがたく思い、近くのことは馬鹿にする。また古い時代のことを重く見て、今を軽く見る。自分の目で見たことより、人から聞いたことを重く考える。逆遠近法である。

若さとは、初心者になれることだ。歳をとるとビリになることなどプライドが許さない。しかし初心者ほど早く進歩するものはない。その楽しさを知るべきだ。

知っていることや懐かしい音楽を聴くのは心地よい。その極まりは、自分のことが話題にされる時である。誰でも自分のことは一番良く知っている。その自分のことが、話題になれば、脳細胞が刺激される。だから、話題が途切れて、間が持たない時には、相手のことを語るに限る。これが話術の要諦である。

考古学も、科学と同じように美しい理論が醜い事実によって壊される分野である。異なるのは美しい理論に安住していても学者として致命的な痛手にはならない点だ。

プロの考古学者はしばしばアマチュアに負ける。「ご破算で願いまして」ができないからだ。

私は想う。研究はロマンに満ちた高尚な遊びだと。人類の長い歴史で、研究というノーブルな行為が職業化したのは、つい最近のことに過ぎない。研究するということは、小説家や画家、作曲家が売れない作品を書き続けるのに似て、最初から報酬を約束された世界ではない。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に遅れをとったり、アマチュアから痛烈に批判されるとは何事か。

歴史や考古学分野においては、第一次資料を提出した

研究者に、その解釈を委ねるという風習がある。特に、分析などの科学的な知識を必要とする分野では、分析を担当した研究者が、その産地や製法の推定にまで深く関わるのが普通である。いわば一般の考古学者は「他人の持ち歌は歌わない」のである。

あらゆる学問分野の中で、考古学ほどアマチュア参加の多いものもないであろう。

このような在野研究者の活躍は、時によっては、職業としての専門学者からの妬みをさそい、意図的な無視や低評価や、業績の横取りを生むことにもなる。

そうなると、むきになるのが人間の性であり、アマチュア研究者は、更に学説を先鋭化させ、強引な論理や主張、無理な証拠を求めて走り出す。そしてその無理が綻びを生み、専門学者からの反撃にあって、また無視や冷笑に晒される循環を生む。

旧石器捏造事件を最初に告発した角張淳一は、十年を経て『旧石器捏造事件の研究』を著し、事件が単なる「発掘捏造」ではなく、「考古学研究の捏造」であったことを明らかにした。

すなわち、この事件は「考古学の学説」の捏造であり、その捏造の方法は「解釈」を捏造したのではなく、「事実」を捏造しているのが特徴だという。

自分の学説や世界観だけで先史時代をつくり上げようとし、国民や国を騙すために、発掘事実を捏造したという「非常に凶悪で、恐ろしい事件」であったというのである。

池田清彦は『科学はどこまでいくのか』の中で言う。

個別の専門学会というのは、ある意味では極めて閉鎖的な組織である。多くの学会は、基本的には会費さえ払えばだれでも入会できるようになっており、一見開放的に見える。しかし、学会誌に投稿した論文の掲載にあたっては、レフェリーがこれを審査して、学会のパラダイムに抵触する論文はすべて掲載拒否をしてしまう、ある意味では極めて保守的で頑迷な組織でもある。

昔は進学したくとも経済的な理由で進学できない者が多かった。しかし学ぶ機会を奪われた者の中には、悔しい思いで独力で学び一流を目指し成功する例も多かった。各職場には、大卒など及びもつかぬ実力者がいて、それが社会を支えていた。

また、たとえ彼らが社会的な成功を得ることができなくとも「経済的な理由」という言い訳を準備しておいてくれた。今は、社会的な評価が「個人の能力」によって決まり、社会に対して、言い訳が出来ない。それは、はるかに冷酷な世界である。

東大出は不幸だ。昇進を続けないと家族からも同僚からも冷たく見られる。ましてや、能力以上に先を走らさせられた秀才ほど不幸だ。鈍才にも次々に抜かれる。

競輪では前を走ると風圧で体力を消耗する。だから皆、後を走りたがる。こんな奇妙なレースはない。そもそも、マラソンで実力以上に飛び出せばつぶれるのはあきらか。世の教育ママはすこしは学んだら如何か。

タレントが続々政治家に転身している。タレントで飯がくえなくなったからか。それにしても政治が食い物として魅力的だというのが問題だ。

議員が多いほど官僚をコントロールできるとでも思っているのか。議員が少なければ、官僚はかれらを怖がるにきまっている。首相は一人いれば十分だ。ふたりもいたら政治はできない。

韓国では、ひとりひとりの国会議員に国政監査権が与えているらしい。

マスコミは毎日のように、〇〇本部が△△議員に提出した資料によれば、「海軍の誘導ミサイル発射二十三発の内五発は命中しなかった」とか「陸軍士官学校出身者の将軍進出率は七十七パーセント」とか「外交通産部の採用者六九八名の内、縁故採用が四四〇名」などと報道している。学ぶべし。

公明党が予想通り、民主党にすり寄り始めた。中間政党にキャスティングボードを握らせてはならない。

長い論理は危うい。短い論理は深みに達しない。

少数意見が反映されない。それは独裁政治ばかりでなく、民主主義の原理でもある。

君は龍馬が維新を起こしたとでも思っているのか。

博愛主義は素晴らしい。しかし、家族愛・郷土愛・祖国愛が固まった後で、最後に博愛や人類愛が来るのである。順番を逆に教えてもうまく行くはずがない。

人みな生をたのしまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事をわするゝなり（徒然草）。